

書 評

丸山浩明編：『ブラジル 世界地誌シリーズ6』朝倉書店、2013年10月刊、176p., 3,400円（税別）

ブラジルは南アメリカ大陸の約50%を占め、日本の約23倍という広大な国土をもち、世界第5位に相当する人口1億90000万余を擁する多民族国家である。本書は、このブラジルの多様性を、開発史に沿って経済・文化の重層化あるいは混在化の過程を丁寧に解説した好著である。ブラジルでは、一世を風靡する国際商品の登場によるブーム（boom, 好景気）と、その急速な衰微によるバスタ（bust, 不景気）が交互に繰り返すサイクルがあり、それに合わせて発現する人や資本の大規模な国内移動や開発フロンティアの拡大に特徴を見いだせるという。ノルデステ（北東部）におけるブラジルボク（毛織物などの紅色染料の原料）やそれに続く砂糖、ミナスジェライスの貴金属や宝石、サンパウロのコーヒーといった基幹的な産物に加えて、牧畜、綿花、タバコ、天然ゴムといった副次的な商品のブームが連鎖的に、あるいは並行的に発現する過程において、アフリカからの奴隷渡来、ヨーロッパや北米との貿易の拡大、アジアからの農業移民の増加の経緯などが順を追って紹介されていく。本書はページをめくるたびにどんどんブラジルの世界に引き込まれていく、そんなわくわくする内容に富んでいる。

具体的に中身を見ていこう。まず、1章「総論－ブラジルの発展と地域的多様性－」（丸山浩明）では、「ブラジルらしさとは何か？」をキーワードに、さまざまな学問分野にまたがる豊富な文献の中から、さまざまな人種が行き交う様子が紹介されている。そして、一見外部の人には雑然と無秩序にみえる多様性に富んだブラジルの中に、実

は組織化された秩序や規範、まとめ、統一性が見受けられることを、「多様性と統一性」、「コントラストの中の調和」、「対立要素の調和的な統一性」、「対立関係の均衡」といった、これまで既往文献の中で用いられてきた挑戦的とも思われるキーワードを紹介しながら、一見では矛盾するキーワードの中にこそ、真の意味でのブラジルらしさが読み取れることを述べている。1章は、ブラジルを描き出すための地誌学からの視座を提供し、2章以降に続くさまざまな事例やコラムを理解する上で必要不可欠な、ブラジルの基本的な歴史的・地理的事項が解説されている。

2章「多様な自然環境と環境問題」（宮岡邦任、吉田圭一郎）ではブラジルの自然環境を概観している。地殻運動の影響を受けた造陸運動によって、ブラジルの国土は西端のアンデス山脈、赤道付近のアマゾン平野や中西部のパンタナール、これらを取り巻くように分布するブラジル高原やギアナ高地といった台地に基本的に分けられること。その後、地表の水の流れや浸食、土砂の堆積といった外的な要因によって形成された地形も広く分布すること。広大な国土ゆえに多様な気候がみられ、雨季と乾季では景観が異なること。また、こうした多様な気候は、結果としてさまざまな植生や土壌を生み出すこと。そして何よりも、豊かなブラジルの自然環境が、人間による開発の進行により、森林破壊や土壌浸食といった深刻な環境問題に悩まされていること。この章では、自然地理学者の目からみたブラジルの特徴が解説されている。

3章「都市の形成と発展」（萩原八郎）では、開発の歴史と都市建設に着目してブラジルの都市システムが論じられている。16世紀に大西洋岸にサンパウロやリオデジャネイロを含む17の植民

都市が作られたことに始まり、その後には内陸部の開拓が進み、今日では首都直轄区（ブラジリア）や全国26州の州都を含め、人口10万以上の都市が288存在している。これらの都市は、おおむね順位・規模法則のパターンに沿っているという。また、3章の後半は国土の均衡ある発展のシンボルとして、それまで未開発だったブラジル中央高原に、車社会に対応し、計画人口50万として1960年に誕生した美しい計画都市・ブラジリアの建設経緯が解説されている。ブラジリアは2012年には人口21万（首都圏人口は300万）を超える規模に成長した。しかし、所得格差や居住問題、貧民街の治安悪化などの社会問題が深刻なことも示されている。

4章「多人種多民族社会の形成と課題」（三田千代子）では、先住民であるインディオ、1500年のポルトガル国王によるブラジル「発見」宣言、16～19世紀にかけて約300年間続いた奴隷貿易によって渡来したアフリカ人、さらにはアジア系移民を含めた複数の民族がブラジルの地で出会い、異なる人種や民族間で混血が進んだ。ブラジルでは、こうした、さまざまな民族文化の接触や変容、創造を通じてブラジル各地に個性豊かな経済、社会、文化的風土が作られてきたという。続く5章「宗教の多様性と宗教風土の変容」（山田政信）では、カトリック教の国というイメージの強いブラジルだが、実際には先住民、アフリカ系民族、さまざまなヨーロッパ系民族に加え、日本などのアジア系移民らが持ち込んだ宗教が重層的に展開しており、多様で豊かな宗教風土がみられることが述べられている。

6章「ブラジル音楽の多様性とその文化的背景」（高場将美）では、元・中南米音楽雑誌の編集長という豊富な知識をもつ著者が、先住民、ポルトガル人、そしてアフリカ人という代表的な3民族の美意識や思想、文化などが混在・融合して生まれ

たブラジル音楽の多様性を紹介している。音楽ジャンルやスタイルは多様であり、それ一つでブラジル音楽を代表させることはできないものの、ショーロ、サンバ、ブラジル北東部ノルデステなどの地方の音楽、ボサノヴァ、MPB（ブラジルポピュラー音楽）といった、外国でも広く知られているブラジル音楽の誕生とその変遷が紹介されている。

7章「アグリビジネスの発展と課題－大豆・バイオ燃料生産の事例」（丸山浩明）は、現代ブラジルの農村地域で顕著な発展をみせる大豆・バイオ燃料生産にみられるアグリビジネスの現状と課題が検討されている。もともとは小麦の裏作として始まった大豆生産は、背丈の低い灌木類に覆われ不毛の大地といわれた中西部にみられる広大なサバンナ地域（セラード）の農地造成事業の展開とともに急拡大した。さらに、穀物メジャーの参入なども加わって、大豆がグローバルに取引されるブラジルの戦略的な作物として成長する過程が述べられている。また、バイオ燃料の生産の拡大もまた、グローバルな視点抜きには理解できない。地球温暖化問題の解決には化石燃料の消費抑制が不可欠であり、その代替エネルギーとして注目を浴びるバイオ燃料（バイオエタノールとバイオディーゼル）の生産が紹介されている。ブラジルのバイオ燃料の生産は、1925年にまで遡るほど古い歴史をもつが、オイルショックを契機とするエネルギー政策の見直しによって国家戦略的に推進されたこと、また、ブラジルのバイオ燃料が糖分を多く含むサトウキビを主原料とすることで、アメリカやドイツなどのバイオ燃料生産の先進国に比べて効率のよい生産が行われていることなどの詳細が述べられている。

8章「観光の発展とその課題」（仁平尊明）では、ブラジルを訪れる外国人観光客の特徴を概観した後、ブラジルが世界に誇る観光地の特徴を、自

然観光地、文化的・都市観光地に分けて地方ごとに詳細に紹介されている。ブラジルでも、1990年代後半からはエコツーリズムに代表されるオルタナティブ・ツーリズムも盛んになってきた。2003年には観光省が設立され、今後はオリンピックやワールドカップの開催によって、ブラジルの観光産業は一層の拡大が見込まれている。その一方で、都市部の治安の悪さや農村部の急激な変貌といった負の側面についても考察されている。

9章「ブラジルに渡った日本移民」(丸山浩明・名村優子)では、1908年の「笠戸丸」移民から1970年代にかけて日本からブラジルに渡った約25万人の日系移民、逆に、1980年代後半からみられるようになった日系ブラジル人による日本への出稼ぎ(約20万人)が取り上げられている。続く10章「日本の中のブラジル社会」(片岡博美)では、日本国内におけるブラジル人の社会と生活、そしてブラジル人を対象としたエスニックビジネスの詳細が紹介されている。

最終章の11章「ブラジルと世界、そして日本」(丸山浩明)では、前章までで詳細に展開してきたブラジル社会の多様性と統一性の形成要因と歴史の変遷に関する考察を踏まえ、ブラジルという国家や国民の特性がグローバルな文脈の中で、とりわけ日本との関係において包含しうる意味と可能性について、編者の詳細な考察が展開されている。

そして、本書の大きな特色として以下の点も付け加えるべきだろう。すなわち、各章の冒頭に添えられたリード文は内容をよく要約していてわかりやすい上、各章の末尾に配されたコラムの内容が秀逸なことである。とくに、世界的に有名なブラジル人に関する3ページにもわたるコラム「世界を魅了するブラジルサッカー」(矢持善和)に代表されるように、牧畜文化の多様性と肉食文化、熱帯雨林の減少、熱帯半乾燥地域のセルトン、逃亡奴隷の共同体「キロンボ」、土地なし農民運動

と解放の神学、ブラジルの音楽スター、鉱山開発、世界三大瀑布イグアス観光、アマゾン移民と日本食、日本のブラジル人学校を扱ったコラムは、それぞれのコラム一つだけでも1冊の本を読んでみたくなるような魅力的なもののばかりである。

一方で本書は、この国の魅力的な面だけを切り取ったものではないことも特徴である。例えば、ブラジルのサトウキビ栽培の過度の拡大がもたらす弊害についても述べられている。農業労働者の過酷な労働環境、飢餓に苦しむ世界が多い現実の中で、本来では食糧や飼料として流通できる農産物をバイオ燃料として利用することの是非、大豆や穀物よりもバイオ燃料用の農作物が優先して生産されることに伴う市場価格急騰といったグローバルな問題の惹起などは、そうした問題の代表的なものである。さらには、サトウキビ生産の拡大と引き替えに進むアマゾンの熱帯林破壊の問題、バイオエタノール工場から大量に排出されるサトウキビの洗浄水や廃液による水質汚染の問題、今日では表面的にはあまりみられない人種差別が実は根強く残る側面も見受けられること、そして、整然と並ぶ現代的な都市景観の拡大の一方で、貧困層の増加や治安の悪化といった負の側面も同時に見られることなどが紹介されている。急速な人口増加と経済拡大を経験し、債務国から債権国へと劇的な変貌を遂げたグローバル経済の「優等生」といわれるブラジルであるが、開発や発展と関連する諸問題のトレードオフの関係を同時に内包する現代ブラジルの姿を、本書はきちんと描き出している。

評者はオーストラリア地誌を専門としており、実はブラジルに行ったことはないのだが、編者と同じく地誌学の視点から一つの国を多角的にみる視点は持ち合わせている。この視点をもって本書を読んでみても、オーストラリアよりも一回りも、いや、数倍も奥の深いブラジルの地域性に驚

嘆を隠せない。ポルトガル国王によるブラジルの発見宣言から500年余を数え、ヨーロッパ、アフリカ、北米、そしてアジアの文化が重層的に織りなすことで形成されたブラジルの多様性を知れば知るほど、日本からみて地球の反対側にある最も遠いこの国に無性に行きたくなる衝動に駆られる。専門書ならではの堅さは無く、豊富な参考文献やブラジルに長く関わってきた著者らの目で切り取った生き生きとした記述にあふれる本書は、現代ブラジルをより深く知る必読書である。

(堤 純)